

## 社会と経営のあいだで、雇用社会について考える

— そのだ  
園田 薫 かほろ  
商学部 専任講師

社会学と人的資源管理論を学び、そのなかで学生の主体的な関心を育てる、学生ファーストの研究会です。開始2年目で、3・4年生20名が所属しています。

園田薫研究会では、まず学生が社会科学分野において自身の関心を持ち、それを学問的に育て、結論を導くまでの論理的なトレーニングを行っています。私たちは雇用社会のなかで生きることを標準的なライフコースと考え、大学生としてその過程に巻き込まれていくことから、基本的には雇用社会のなかで生きることに関心の種があることが多いです。

しかしながら、園田薫研究会の特徴は、あらかじめこのテーマを学ぶ、という限定を設けないことにあります。まず3年生の初めで、社会学と人的資源管理論それぞれの基礎を学び、思考の型を習得します。なぜなら、自由な発想で自分の興味・関心を見つけ、育てることは、想像以上に難しいからです。これまで取り組んできた経験、吸収してきた知識、それを内面化してきた理解の仕方がしっかりしていなければ、その先の興味・関心は湧いてきません。まずは一定の理解の仕方を習得するために、私がこれまで習得してき

た社会学や人的資源管理論の考え方や知識を教えます。その思考の型を応用する形で、学生自身が持つ関心の種を育て、誰に見せても恥ずかしくないように仕上げていきます。持っている関心の種は人それぞれで、どのような花が咲くのかわかりません。それでも、どんな種を持っている人でも受け入れ、種を育てるプロセスを教えることで、色とりどりの花を咲かせることを、園田薫研究会のモットーとしております。

昨年度の3年生は、春学期を通して基礎的トレーニングを積み、夏合宿で個人の関心を育て、秋学期では2グループに分かれて研究内容のプレゼンテーションと論文執筆を中心に実践的な活動を行いました。12月には、共著論文を仕上げてインカレで開催している日本の経営研究会に参加し、100名を超える参加者の前で報告会を行いました。ただし、今年も全く昨年同様に進むのは、わかりません。主体性を何よりも重んじて、ゼミ生と一緒に創り上げていくのが、園田薫研究会です。

### 問いを見つけ、対話で学びを深めるゼミ

しみずけんぞう  
清水堅蔵君 商学部4年

園田薫ゼミの魅力は、答えを教わるだけでなく、自分たちで問いを見つけていく空気にあります。4年生10名、3年生10名の計20名で活動する本ゼミは、開設2年目ということもあり、ゼミの進め方や雰囲気もゼミ生全員でつくり上げています。発表や討論では、一人の素朴な疑問から議論が広がり、思いがけない視点に出会うことも少なくありません。昨年度は他大学との合同研究発表にも参加し、自分たちで問いを立て、調べ、伝える難しさや面白さを実感しました。先生も私たちと年齢が近いため親しみやすく、学生同士も率直に意見を交わせるため、自分の関心を深めていける最高の環境が整っています。



# 高度な技術と最適な治療で脳を守る

脳神経外科では、脳の病気から患者さんを守るため、高度な技術を駆使して、個々の患者さんに最適な治療、すなわち最も安全かつ有効な治療を行います。

と  
だ  
ま  
さ  
ひ  
ろ

戸田正博

医学部 教授

脳はヒトの活動において最も重要な臓器の一つです。その脳の手術を担当する唯一の診療科が脳神経外科です。我々は、脳血管障害、脳腫瘍、頭部外傷、小児神経疾患、機能的脳疾患などさまざまな脳の病気に対して、24時間365日、救急医療まで対応するプロフェッショナル集団です。

最近の医学の進歩に伴って、言語・記憶・情動・意識など、高次脳機能を構成する神経ネットワークが解明され、より安全な手術が可能となり、さらに治療不可能であった病気を治す新たな治療法の開発も進んでいます。神経科学の発展と医療技術の進化とが両輪となって脳神経外科の治療は大きく進歩しているのです。

慶應義塾大学病院では、治療困難な脳疾患の患者さんを多く診療しており、頭蓋底腫瘍の治療では世界をリードする実績を誇っています。特に最先端の神経内視鏡手術を駆使することにより、到達不可能といわれていた頭蓋底部位に対して、低侵襲かつ精度の高

い手術を提供しています。これまで治療を諦めていた患者さんが、術後に笑顔で帰宅される時、日頃の疲れも吹き飛び、我々も心から元気になります。悪性脳腫瘍に対しては、覚醒下手術、光線力学的治療、最新の放射線治療、さらに遺伝子解析に基づく薬物療法などを組み合わせて、個々の患者さんに最適な治療を行います。また、脳血管内手術の発展は著しく、これまで開頭手術で行われていた多くの脳血管疾患に対して、最先端のカテーテル手術を行い、早い社会復帰を実現しています。

さらに我々は、新たな治療法の開発研究も積極的に行っています。腫瘍が多発して、手術では治療困難な神経線維腫症Ⅱ型に対して、ワクチンによる免疫療法を開発しました。現在、臨床研究の段階ですが、多くの患者さんで腫瘍の増大が抑制されています。国内のみならず海外の患者さんに対しても、新たな治療法として届けられるよう、全力で取り組んでいます。

## 臨床から研究へ、研究から臨床へ

から っ こうすけ

唐津皓介君 医学研究科博士課程2年

脳神経外科学教室では、脳腫瘍・脳血管障害・機能的脳疾患の3つの柱を中心にさまざまな研究を行っています。例えば脳腫瘍研究班では、脳腫瘍が多発する難病である神経線維腫症Ⅱ型に対する世界初の免疫療法の臨床研究や、近い将来に臨床応用を目指す悪性脳腫瘍に対する遺伝子治療など、新規治療の開発に直結する研究が行われています。また、AI研究にも注力しており、蓄積した膨大な量の画像データや診療情報を統合し、未来の診療に役立つ知見を得ることを目指しています。「患者さんの治療につながる研究」を常に軸に据え、臨床と基礎研究を行き来しながら脳外科医として成長できる環境です。

